重修真書太閤記

三編

六

~13
459
26

へ13特
門 攻 古
號 459
巻 26

渕神藏

重修眞書太閤記三篇巻之十六

大河内本城合戰の事

并木下藤吉郎池田信輝小謀を示す事

阿坂落城して大宮父子降參しゝを共木下藤吉郎偽を察し信長に面會をしめし密小父子を誅せしいバ明智光秀以下乃諸將こゝを怪うて平常秀吉を降參の者と嘲ることを好まざるゝ大宮父子を誅せしことその意を得ど彼等が勇氣を忌て偏執を起せしうまこゝ大之丞よ射らるゝことを憤てし故ゆやあらんこゝを私事ゆゑ嫉妬偏執の為に勇士を害せしこと

河攻會印

忠臣ふあらびたあと謗るものも多くあるけるわどよ
いつゝか秀吉の耳ふ入々きハ藤吉郎大よ笑ひ軍よ出
ふゝとの者ゞ疵と蒙て手を負ゝてその敵と恨
ふ暇ゝあるべきか我大宮ゞ矢に中てしかとを痛む
わどの疵まあゝぬこゝふ人の知処ふう然ゝよ左様
ゝ批判とゝ形ゝとゝ士卒雑兵の上あゝびちもみゝ
明智わどの者とゝて是程の道理と弁えぢゝこと豈
ゝゝかゝびゝや助くゝ屋さハ助け殺もゝきハ殺ゝゝ
大将の眼鏡ふう大宮父子の心底と悟て得ざゝこと殊
よ可笑ゝこゝ形ゝとゝぞゝけゝ信長よも始ゝ諸将の言
ゝゝぢゝ就て大宮父子と誅ゝとゝ秀吉の心中ハふゝ

彼等ゝ降叅の真偽ふよと證ゝて知ゝふやふと
疑ゝをあひしかゝもさゝ秀吉ゝゝ形ゝ楚忽の
振舞あゝびゝと思召て何とも仰出さゝこゝ形ゝ
ゝに彼父子と誅せしゝとも立歸て入道ゝ最
後に信長ゝ明智の良将ゝふ我くよ面會あらばやゝ
その儘に置ゝきゝそれと察ゝ胸中恐ろしゝと
ゝゝと言上ゝゝ及て始て木下ゝ謀の神よ通ぢし
と忍ゝ中よ感ぜゝれ諸将もまゝ舌とゝゝゝゝ
驚き何様秀吉ゝ凡人形ゝゝあゝあゝゝあゝ
けゝ去程小信長國司の本城大河内へ押寄ゝゝ
その夜直よ進發ゝゝ翌る廿八日早天よ信長の七萬

餘騎大河内の城の東の方桂瀬山より打上て追手搦手四方の手分をなしあり

大河内乃東より松坂川をへたて桂瀬山あり

先東乃方い信長の先陣柴田權六郎勝家森三左衛門可成佐〻内藏助成政不破河内守同彦三山田三左衛門尉長谷川與二郎梶原平次郎丸毛兵庫頭同三郎兵衛尉佐藤六左衛門尉秀方丹羽勘助氏次同源六郎等なり南乃方ゟ長野上野介信兼織田掃部助稲葉伊豫守池田勝三郎丹羽五郎左衛門尉和田新助中島豊後守同勝太郎蒲生右兵衛大夫同鶴千代遠藤山城守山岡美作守永原筑前守永田刑部青地駿河守等なり西の方〻佐久間右衛門尉信盛是も京の奉行職として在京をゝか伊勢退治より漏んことを歎きけるゝ態と呼返さるゝく供しなり

ちうゝの手ゝ嫡子左京亮與力ゝ飯沼勘平市橋九郎左衛門尉安藤伊賀守塚本小大膳阿閉淡路守同萬五郎三橋傳左衛門尉等なり北乃方へハ齊藤新五郎坂井右近蜂屋兵庫頭築田彌左衛門尉中條又兵衛尉礒野丹波守等なり偖又柵際見送りの役として前田又左衛門尉湯浅甚介生駒甚助近正福富平左衛門尉川尻與兵衛尉村井新四郎中川金右衛門尉生駒小助長谷川權助佐脇藤八郎荒川新五郎瀧川彦右衛門尉等なり木下藤吉郎ハ昨日阿坂の城攻て浅手なりし手負しかゝ

養療かたく浮武者とふつて弱からん方を助くべしと
定められたりその勢都合七萬餘騎四方を鐶て取圍
しかい何ある要害ありとも保ちがたくぞ見えゆける
然ども此大河内の城しかも極く嶮岨乃山城まて無
双の勝地あり七ツの尾七谷ゆ発くりく南を大河内と云
こゝを虎口ありその後ゆ龍藏庵坂とらゆ難処ありこれを
野津とらゆ追手ありこゝ廣坂とらゆ處ゆい大木大竹茂り
てあらゝび形き切處あり東ゆ大河内の川深く西ゆ養德
寺とらゆ大寺ありしを焼拂ふく敵乃足をたゆちをし
と搆へたり城中ゆを國司の一族譜第の諸士勢州隨一乃
勇士究竟乃逞兵數を盡して三萬餘人籠つたれど

矢玉兵粮沢山ゆして軍兵も多くゆけまも勇猛の者共
あるべかくの如き軍して味方打死手負乃増ばりう
容易落城をつき時をしられども何方にても攻
て安きかさあるべしそれを打入てゆ惣搆を乗
破りふいそれりうまゝ工夫もあるべきあるしとひそう
ゆ言上せしかい信長聞食何ち女當城乃堅固あること
尋常あるべしをを攻破らんと木下あるでいあるまじ
きあるとれがしも秀吉ゆ指揮をべしを仰
付られたりう藤吉郎承はりて惣搆を破るの工夫を
しけるを四方とあた嶮岨の坂道ゆして登るふかたく下
るゆ便るし伝く熟地理を考ふるゆ南乃方龍藏庵

坂乃手いさゝか破るに便あらんと見請頓て此口の先手池田勝三郎信輝と對面し ひそかに當城堅固ふ一て急に攻落さんも見えず然共惣構を乗取この方ゝ鹿垣を結廻し城方ゝ夜討をする様ゝ用心して暫時軍を止め城中退屈して内變を生ずべし 但惣構を乗取こと容易かゝじ御邊もし某が申に任せられ一方便あらばひそかに惣構の一番乗疑ひあらじ南乃方一ヶ所破れあい跡三方もいづれも乗取ゝまあり然れいこと大切のゝゝめあるべしいかゝやゝと密語けふそ勝三郎大ゝ悦びこと兼て某ゝ望む処ふひふぐゝゝ破るの謀計を示し あとよりけふゝゝ藤吉郎いはく

足下の攻口龍藏庵口切所第一にゆゝとも市場病を攻破るゝそれゝゝ段ゝに進ゝゝゝ城兵ゝゝも後の嶮岨に心あくれ踏止ること叶ふべ二九ゝして引入んこと疑ひあ一因ゝ今宵御邊乃勢ゝゝゝを以て密に市場邊にあ一出し火矢を射掛在家を焼立ての勢に乗て攻入ゝ此口の番兵共周章騒き防ぐ便を失ふべ一その時味方乃兵士五六十引ゝけ左ゝの尾崎へ引ゝゝ坂口へ進む体をふ一ふゝ城兵ども前後をゝゝて暫時も防ぐこと叶まじ一その時御邊乃軍勢いかゝ勇氣を逞くふして進ゝゝあば城兵惣構を棄て引入んゝこと必定あらんこと教訓ふ一けるべ信輝大ゝいさゝいさゝや片時もゝやくその用意をふ一りゝ

とてまづ郎従に兵粮いらハせ戸倉四郎兵衛片桐半左衛門
木笹十内その外究竟の兵士五百餘騎を引まけその夜丑
みつ過る頃密に陣中を抜出市場の宿へと押寄けり

池田勝三郎大河内の惣構を破る事
并國司方本城へ引入る事

池田勝三郎信輝ハ木下か謀略を受てその手の逞兵五百
余騎を引まけ八月廿七日の夜丑三とおぼしき頃より我陣
所をぬけ出龍蔵庵の惣構市場の宿へと忍びくに押
寄ひそかに敵の容子を伺ふに此手の大将ハ國司の家に
て名に聞えたる日置大膳家木主水その勢千五百餘騎に
て固めたり

日置大膳亮ハ藤原氏高杢左衛門督の弟飯高郡松ヶ嶋
細首の城主家木主水ハ紀氏一志郡家木の城主なり
いつれも武勇ハ人に譲らねども今朝より暮まで終日の
合戦に労まけて大将帷幕をたまもとく寝処に入バ士卒ハ
兜を枕に前後もしらびさてとく日置家木の両大将
ゆだんなく掟厳重に定つまれバ処々に引分し番手の兵共
怠るとまハあらねども心労まし気緩みて夜を既に更たり
夜討なとハおもひもよらねバ怠屈のあまりて用心気もなく
く熟睡せりと斥候の者ども見とまし走て帰りてかく
斯と告たりしかバ池田ハ大に悦び諸士をあつめられ
天より授ふ時いたれり面々粉骨して忠義を尽しな

ふべしと教訓諭げまつれば従者等も一段の勇氣を奮し我劣らじと進みける既に柵際に近づくと等勝三郎信輝射手をそろへ三百人左の方一面に並べ備へ〜めを後に騎馬の兵士二百余人轡を聯ねく扣えさせやがて相圖をふりけるまぞ三百餘人乃精兵整に立揚て拳下りに火矢を柵乃中へ雨と繁く射込たり番兵どもこの音に驚き目を覺しこれいかや柵乃中所〻に火移りて燃立敵もまた柵際に寄来つゝく関を發もとゝやゝ敵襲ひきたりしぞ物具をとやゝ者共よ夜討の入しぞ早出會やと呼そゝてといつまも狼狽しける寝惚まぬ眼乃ことにしく鎗一筋に二人三人とゝ対て引争みもあまぼば太刀長刀乃

鞘を失ふく手惑みもあり周章みさめく處を池田が兵士六百余騎得たりやかとばかりに手〻に柵木を引やぶり乗込く城兵を突ふせ切ふせけり廻りけるに千五百余騎乃者ども不意をうたれ敵味方乃色合をしらぬ火矢乃光りを知べに防ぐんとすれど池田が兵士四方に切廻りて景を止めぬうちの小勢なるべしとゝかゝるひもゝゝ織田殿の大軍續て込入しものゝかんと氣臆まし兎ても角ても此処にて防戰叶はべうぬと誰が説とゝ知ねども逸足出して逃るる輩多く敵に向ふんとゝゝのゝとゝふりけるまう寄手いかく力を得て電光石火あんどうも烈しく攻げまべ

持口の預り日置大膳家来主水こゝを破られてを叶ぬと
池田り勢に駈向ふ池田り郎等戸倉四郎兵衛鎗を取て家
木に突くゝる家来も聞ゆる勇士ぞう心得たりと太刀
打ふゝく馳向ひ一交もをび戦ひけるを戸倉が傍輩八
木笹右衛門横合ゝう進み出ゝる時ハ誰彼乃差別を
勇士乃首ゝう柵乃木を引抜たるか手柄ぞゝと云
も敢び家来小突のけをい主水勇氣あまりたるを
を戸倉八木乃両人を敵とふゝ勝を取ぬき道を爰
まて討死をんもまゝ無益ぞとおもひ返して引退け
戸倉も八木も打捨ゝて殘る兵士を切崩ゝ猶競ひか
うふをゝく日置大膳五百ばかりの軍兵を引率ゝ出向

をんとふゝけるを池田勝三郎乃勢左の尾先を目うけ進
ふゝを見返り日置大膳かもひけるハ此手乃軍いさゝと
ふゝ坂口を塞ぐれくいたやをく引入と叶ぬべゝ
早く二丸を入く持口を固ゝるを如ぞと思案ゝをの
まゝ馬を引ゝけをを池田ゞ兵士等勇ゝをんぐ
揉立ゝをを難ふく惣構を乗取備を立く持固めた
う兎角もる内を夜もあけをふまけるを東西を北の
方の寄手等池田り南乃惣構を攻破ゝと聞てゝふ
美ゝ寄ゝをとハ同じく寄ゝるて面と何とて池田ゞ勢
ハ抜くれゝぞや早籠入く手柄乃ぞと顯をゝやと
呼ゝく大将乃下知をも待ぞ三方同時を人數を操

出し惣構を引破らんとて働きける城兵隨分防ぐべき術を盡し手を碎きて走廻るといへども昨日の軍より
るかうり搦手龍藏庵の惣構を破られて寄手の軍兵充滿たるを防ぐ城兵心臆して氣勞するやもすれば
浮足よりて備くだるを定まるべく寄手いよく力を
得死生しらぬの尾張武者揉立て責立る中ゆも北方れ
寄手坂井右近廣坂口まで一番乗入あたりを拂ふて
戰ふを此手の大將鳥屋尾與左衛門水谷刑部爰を先途
と防ぐとりども寄手の大將まで並こるぬ坂井父子
ありて嫡子久藏大勢を抽んで真先を進めば城
中防ぎるく右往左往を散亂し二九ちく敗走

をり鳥屋尾水谷大を怒て怯きたる振舞ふ軍いかくをあををのをまて蹈止りて戰ふを坂井久藏十
四歳と名乗て渡りあをを水谷刑部を突くかる刑部
も鎗を取て立向ひ久藏が弱武者なるを見て是を侮
り輕んじ只一鎗を突伏んとをやをでを久藏去年十
三歳乃時さに江州軍を初陣して名高き建部と鎗を
合をしかどの勇士なるを今年をまて力量も武藝も相
應を增長しけるを事ともをば水谷が鎗を刎落し
勢猛く突込けるを傍の石を突當鎗乃穗先を突折
たり水谷らきひまどを大太刀をりあけ久藏めがけ
打て掛る久藏元をり心をやきたのあをまば馬乗もど

しこれも同じく太刀を抜き走かる水谷ゞ郎等家ぞ
んうの体を見居たりしかるくても主人危ふふ
べしと打ちひ大勢一度に切掛るを父乃右近ろるの
見付馬をはしらせく馳来て水谷ゞ郎等どもを切ふを
く進ふけるに水谷主従何うに以てたゆべき透間を
窺ふく引そづ。こもも同じく二丸さして引入けれ
坂井父子跡を慕く攻入んとふ。りるを坂道急は
く難所なるに猶豫なるけるうに味方もまばらに續う
孫ゞ一息繼く居たりける然るるとふく齋藤新五郎
蜂屋兵庫頭築田中条礒田う輩追く乗込しかも北の方の
惣構も既に破るけるこれふうう東西乃寄手いつるも

劣るるまじと攻立けるこもも城中ふるく狼狽し惣
構をとて切所を守つるく防戰をんことをるのう引色
に見へしを寄手競ひのうるく攻るものいと崩れ
たりく四方の惣構も然破るたるものうを本陣へ
言上るいい信長大に悦ぶもひ昨日も城責に多
くの味方を損せしてけるを木下う計策に因く南方
の惣構を破つしを初に終に三方ともに攻破う
しこの心地うは兎角木下ゞ城責乃名譽を得し
えのうるに深く賞美るしもひ惣構のうらに鹿垣
を城にむるく結せるもを城中大に難義の体に見
へたるを流石名高き名城乃要害うけるに今日

明日は落べくも見へぬその上は切所多く足場あしけ
れども味方の大軍陣取ることあるべきにも此方うち
柵鹿垣を付く敵の出入をとゞめ味方うちの時機
をはからふに緩は攻掛らんと用意をなすあり城方は
とも惣構を始終守り難うあるべし自然惣構破れ
あるを本城は引籠て寄手近くと陣を取んとき坂
うまくうち落し追散さんと打そひ設し処かく
乃如く獅子垣を大丈夫に結廻し四方尺寸乃余地
もなく備を立列ねたるまゝ敵を拂そんと
をかをひもらしその上城中乃持口通路自由を
得ざるしうるとくの計策相違しく見えたり

けり然ども元より城中兵粮乏しく水乃手矢
玉木石その外萬事不足なし何まぐれ籠城とも
とも困窮をばなる様多年用意の上あれば左乃ごとく恐
るゝとも続く後詰乃頼もあり只累
代忠義鋏肝乃烈しさぞかしく城を堅固に守る
ゲ名は寄手もまた四方絶壁のごとく要害を見上攻
あぐんぐと見えたりけれ偖また伊勢の國中南北と
もに織田家に属せしとも八田の楠一人降参をば
その外上野岩内なども籠城していまだ陣頭に降ら
ぬ是等しを元より物うとるべく楠いうに猛しとも
その勢五六百にもぎざるまた左ほど恐るに

及び大河内もかくまて攻詰めまぎこまてと終よ
と落城もとべ〳〵急ぐことのあること戰を止めて
徒よ四五日を過されけるを摘聞出〳〵今度の始末國
司不智齊思慮淺くしてこの籠城よ及べども兎よ
も角よも勝つき道理〳〵けるば寄手を八田へ引
く織田の勢を二りよふ〳〵軍をんとけるとしよ
八田へも織田乃軍勢一人も向そはを摘ゲ計相違〳〵
織田乃軍勢七萬餘騎大河内乃本城を圍こ惣構を
乗取鹿垣を着く戰を緩めけるとう城中頗徒然
に及ぶうたるのよ告るこのあるけるとを正具
奇計を廻ら〳〵寄手を驚らをやとそうれども

織田勢備立嚴重よ用心らけまてを麁忽の事も行
そまてと如何もとをきと思案しけるに急度妙策
もをんゲ出〳〵たるそまを大河内乃東川よそふ
く船江といふ処あること一城を構つく國司乃郎
等安保中務安居新九郎といふもの一千余騎よて楯
籠つたり往よ織田勢乃大河内へ向ふとき途中へ打
出くさまたげを〳〵ともあまと船江乃近邊切所
ふまを信長もそのまく棄置けるを摘きくおれ
究竟乃こと形り安保と安居に一方を襲そせまを
まこその尾を討ゲ〳〵とこその計を様こよ工夫ふ〳〵
たるけを

重修眞書太閤記三篇巻之十六終

重修眞書太閤記三篇巻之十七

楠正具船江乃城へ密謀を通ずる事
并安保安居等寄手乃陣へ夜討の事

楠七郎左衛門尉正具織田の大軍國司乃本城大河内を圍ミ四方の惣搆を乗破て勢頗る盛ふらと聞く寄手を取挫き籠城の諸士乃心を勵さんと工夫を凝しける幸ふるうふ船江乃城よりける輩一働しく本城乃圍を緩ゆんとはかりふらしを告る者あるしかを是究竟乃こと形うその圖をそゝりさゞ自身も討て出んと腹心乃郎等松本弥四郎とそのを使ゝて謀計を

を中含め船江乃城へぞ遣しける
船江今船井といふ飯高郡よりて松坂川の北よあ
て松本弥四郎を伊勢平氏中宮進士教光次男松本
三郎盛光乃子孫なり
弥四郎ひそかに船江よりいたり安保中務安居新九郎
に對面して正具乃書翰を出し密謀の次第を述しかい
両人大に勇を立我等この日比一夜打して寄手を驚うし
本城に籠る面々この勇氣を増んとおそれいども然る
べき便宜を得ずして黙止たりしが正具左様の心入
あらば虎に翼を生じ龍に雲を起き勢に乃ることい
如斯事をいふべしとて松井を歸してそのち楠ゆき

たる奇計にまかせ數十艘の船に奇兵を取のせ大河
内乃川傳ひに信長乃本陣桂瀬山を襲に体をなし
安保安居の両人も選兵七百餘騎をもくりく密に間
道を經西乃方へ寄手をおひやりとびしとそ計つ
る然乃ち九月五日の早天にて件の船をそ川に浮
め乗出さんとふしけるを案のごとく織田家の斥候此
容子を見咎め速に本陣に注進を織田殿聞食て敵の
奴原に振舞ふらんおのれ志の殊勝なるに寄来ハ一人
も餘さじと討取るやとて旗本の兵を引分て川添の
切所〳〵に埋伏をそのち城攻の諸將等へ下知あるけ
様をたとへ敵本陣へ切かゝることあるとも是を見けぐ

よ及ぶべく各請取の役所くを専要とふ〜城攻乃隙を明るとて扨うまて鬮流〜用意嚴重に備を立て待まつといつども寄手一人の影も見つと明智光秀中けうこうあれ敵乃謀ふべけも舩手うつくる体と見をく味方よ防戰乃用意をあるを終日兵士の氣を疲らしめちく後に陸地うり不意よ夜討をんとの謀ふべ〜案内知たる敵とそをり御用心あるく然るべ〜と言上〜けまい信長實もと思召陣中一同へ觸示〜夜討の用意をふ〜あよ木下藤吉郎斯と聞く本陣へ參上〜夜討の御用心を仰出ちくこと早敵乃方策よりらをあよてい必竟敵乃体を伺ひよ

城攻乃諸將の陣くを襲をん為よ大將乃本陣よ掛る様を見をいまく實よこの御陣よ向ひいまくハ更よこと扨くい敵ぐこて智謀のをのもいべけまハあふしお御油斷ふく敵乃機よりうて御差略あるべく存い因く諸將の陣くへ御沙汰あるく能守るべき吉嚴重よ御下知あるく然るべくい此敵をを〜御本陣を襲をんとのことよいるを〜爭でら明らにその体を見きゆ爲きや虛實變化を軍の形をひまくいをのをさまをそを爰を攻る体とふ〜をかをことを襲ひ南を擊うとしてをいを北を討ことをていふを別ていをんや御本陣よを兵士おわく然も警衛乃怠るふき

とも敵も存知の上なれども船江よりそる敵の兵士多くとも一千余人よりも過ぎしこの兵をもつて討て出るとも五百六百ほどを多くとあるまじそれば其の勢まて何ほどくこの御陣の堅固なるを夜討ほんどのあるべきや少しも恐るべきやうねども油断の大敵とも諺もゆへ諸手の大将たち心を上りよして能守るはほど氣遣なることゆまじ去とて今度の企船江の輩ぞかまはもいはじ必定他よりを合はるものゆひあん御賢慮を廻らさは然るべしと言上しけれとも光秀うちくやけ様虚實變化の理あるゆへ御本陣こそ別して大切なれ

とたしなく責掛る体をふ〳〵然他の陣小寄るふらんと推量ふさぜ諸将の陣を堅固に用心させ本陣の加勢に出ぬ様に計るたく當御本陣に取掛ん共又案の内のありいつまてもこの御陣の御守りく遊ぶたまんと肝要ゆとやけるを信長聞召両条ともその理あり但何方ようり夜討来るとも何程のことかあらん少しも恐るに足ず諸手の備を元ようり定給へ旨を守りて謹怠ることふれと即時に使番を以て陣〳〵觸らせけるのち既にこの夜も寅の刻暁ちかくふるといへども夜討の氣色更になく最わるやうに見へるとふるまいいるとと陣くに待そうけたる兵も眠

氣きづかして自然緩む心を取直し一たゞひよ疲を諫
先合漸その手を塞ぐべくあるべきバ桂瀬山のあふさ
うを広うふ焼松乃光つあるいまくや近くあるまで
もこゝを知ぞ斥候の士卒に驚うちまあ八いるよ
といあるどにその火段く數多く焼けゞその蔭う
餘多乃旌旗をあびうして敵こそ多く出来つるれ
織田方の陣こふるかに騒ぎいこまるや夜討のよ
を来るい出會や人こと呼ぶもく馳廻つまかば居眠
居たる兵士どもいまゞ覺ざる眼をもうく鎗よ太
刀ゝ物具うと立上つて御本陣へ斯こと注進をかども
信長少しも驚きあるに静よ井樓よりけ上りうれ

を見るよよ何さあ數千の敵押寄来ると見いく夥
しい是よ於く兼く約束形置まし所あるまでを旗
本乃兵士を引まけそれ〳〵差向て防ぐを然るべしを
下知あるけるを光秀隠と見渡しこの焼松を奇兵よ
してこの邊乃地下人どもの駈催さまく大勢の寄る
氣色を見るるとゝ更よ御心よ掛さをあるべきにあ
らゞ實乃夜討を此外よあるべしとやもをてぬ處よ
右乃方の山乃麓うを鉄炮乃音一發よるやいふ間乃
聲をあげく本陣よ切く懸る如く聞えけまゞ光秀
立上てこゝを伊勢武者の隨一と世よ名高き楠
正具ありべけまゞ麓よ下立一戦きん續や物共と勇うけ

あるを木下藤吉郎忍ぶ〳〵と押止め両方共よ偽兵あり決く實の寄手あらゞ捨置あるべきものゝ退散そゞ〳〵と諫むるを更よ耳ふも聞入びるゝ切たる若武者どもゝ先小と打く出寄る夜討を支へんとひしめけど敵を声乃こゑあく形ふく何方をさして戰ふ色きと不審ふぐゝ関乃声をしるべよ打向へを或を深田或を畦道を道形き處へ押寄て取て返〳〵そよ爰ゝとひく騒ぎよさはぎける中よ夜を乃のぐと明ゝるゝ雲透よ四方を能く見ゝるを敵とゝふるの一人もふ〳〵正〳〵関乃声を聞えゝるのをと疑ひふぐゝ猶進めどもこゝをそゝふ手掛もふ〳〵何様狐狼乃所業ふやと怪くふぐゝ引歸ゝとゝを船江の安保安居乃輩霄ゝ支度し時刻を相待寅の刻も及ふゝ乃楠ゝ合圖よ従ひ先手乃勢を出しく扨そひの儘よ信長乃本陣を騒ぐをその後逞兵百騎ゝゝと率〳〵関路山乃東を經く西方よ廻ゝ寺井の邉よ陣を取織田勢をおびき出〳〵ゝとを討んと計つける借まゝ城攻の寄手等を本陣ゝゝ乃下知を守ゝ夜討の用心をふ〳〵味方大勢ふるを頼く心中ゝを何条夜討の有べきぞ當國乃諸家さかどよ忠義をおくゝふゝべ何とそ本城へ取詰る敵を今まで余所ふい見て居ゝをきぞ是ゝを

敵乃謀まて左様乃ことをいつからんあゞ〳〵推量〳〵
別まて用心とるまでもあ〳〵されども今宵を宵のゝど
うゝを心配〳〵つゝを丑三ゆゝろ〳〵〳〵そゝろふく疲れ
眠く陣〳〵油断多〳〵ける就中西方乃寄手の中氏家
常陸介入道ト入全安藤伊賀守両人乃陣所寺井の病を
諸勢〳〵つゝ少〳〵引下てゝ所あまべいあく機遣ひふ
〳〵と怠り居たりけるゝ舩江の兵士案内を知たり
何の陣あても討安きを討んとく恐を入く窺ひける
まて氏家安藤ゞ陣〳〵そ用心怠てゞげまて見へたるあまてと
告〳〵ゞ然べその隙を討んとく寺井と〳〵〳〵く押寄
七百余人を二手とふ〳〵左右まてまく安居新九

郎を安藤ゞ陣まてゝ安保中務ハ氏家ゞ陣まてゝ
両方同時まて鉄炮を打うけ乱合ひ竪横まて懸破てゝ東と
関を作つゝ西ハ向ひ北まて鉄炮を放く南まて廻つゝ大勢の
如くゝもゝを切立けるゝ両陣乃輩〳〵寐ぼまるゝ
ゝゝあまをゝ鯨波乃声鉄炮乃音まて驚うちまて取そ
のも取あへず駈出をいゝゝ敵〳〵〳〵入て雑立突立
勢猛く進んゞ働きけるゝ氏家安藤ゞ兵士等うゝ
ゝゝの数〳〵いゞ狼狽騒ぎ敵味方の別ちふく同士
討とゝもあ〳〵氏家ト全安藤伊賀守いづまても聞ふふ
勇士あゞ〳〵事不意まて起てゝ〳〵上味方の士卒右往左
往に乱まてげうゝて何まて下知をゝでも耳ゆも聞

入ざいうんともをぐき様ふく自身よ鎗を取て駈出
爰も前途と戰ふたり氏家の郎等蜂屋般若之助士
卒を勵まし勇を振ふく敵を追まくり眞先よ進く
く戰ふを安保ゞ士卒走廻く放つ鉄炮よ般若之助頬
先を打ぬ眼くみく働き得ぢる所を船江方の津川
主水走寄く引組終よ蜂屋ゞ首を取兜角もくくら西
方の寄手の陣くくり加勢の兵出来り殊よ夜も明ん
ともかゝる船江勢打そひのまくふ夜討ともを爲負を
たり早退けと一同よ人數を集め小道より早くに歸
をけり加勢乃輩来てしかども敵としよくの一人も
形くくふ引舉し跡ふまべ歯喫をふしく憤れども

その甲斐もふく味方の討死百五十余人手負三百余人
に及べて敵をバ僅よ十余人を討たりけり無念ハいふ
もかのふく爲方盡くあの由本陣へ註進したりける
小木陣ふても桂瀬山の奇兵を討んと打出し若者共
敵ふをあくで爰かしこを追走くるも仕出しこと
形く引入処ふく西方の氏家安藤ら陣夜討のたゞよ
打破らぬし訴と時おふじかりけるバ偖くを木下ら
ヤをくことばの未違くバ不思議ふくける智略かふと
信長をけり諸士舌を振ふくを怖恐をける

木下秀吉信長を諫ひる事

并氏家安藤船江乃城を攻る事

船江ノ敵ども氏家安藤ノ陣小夜討して味方多く討ぬ一由ノ注進あるけれい信長大小怒ってらひ左様ノともあるべし能く用心とべしと先達て下知を加へし又用心怠ってあきらかたるかよりにあるべや然る又念なく打負兵士を損きること返々も遺恨ノきと敵を定免るく小勢ノあるべきなのまに陣中を駈破らぬ一条両人ノ越度少ふるべ軍法を以くその罪を糺とべしと宣ひけるを木下藤吉郎聞もあへず敵ノ城いまだ落去をざ然るよ味方ノ大将二人を誅きられあだ敵ノ威をはし味方ノ勢を減を道理なく且を御恥辱とも相成ものべし暫くその罪を宥め後日の

功を以くくぬを贖ひ様御免あるし遣さるんと御仁心ノ至りゆそひべし殊又彼両人を元らうの御家人又あるべ美濃御打入の時又御忠節ナせし輩ノあるべ彼是又付御宥免ノ御沙汰然るべくゆとナてうう信長怒ってを押え使者を以て氏家安藤等へ今度の罪ゆしがくしとのべども前この功勞あるの名一命を助け差置処ぬるを以後の勤功を以くくその罪を贖ふべしと仰出さるけるを両人謹んぞ畏て有がたきくし御請ナ上御本陣又来って禮謝しけるを偖信長船江の輩ノ夜討をしことを深く憤ってあひ彼城を蹈潰して捨べくしと大事ノ前ノ小事あるとおそんさし置めること残念の

至るゝ然るに今度乃振舞奇怪至極今に於てハゆる
しがたしとゝ大軍を向く責落さゝべしとあり
けるを木下藤吉郎ゝて早く今度夜討の仕ゝ等
問ふゝひあるゝど船江の城中ゝ斯まぐ智謀の者ある
べしとも知れざるこゝ必定他ゝ教しゝものあるべ
し夫を誰くゝやと推量仕るゝゝ八田の摘正具ゝく
ゆべし正具元ゝ御勢を侮ゝくゝゝゝ此度も船江乃
輩と示合せ置たる謀ゝくゝゝゝゝゝゝ八田の城
ゝを兼て丈夫の押へゝも置るべきゝ小勢ゝとて捨
置ゝしゝ忘ゝ斯乃如き災ひあり船江乃城を責ん
とて大軍を動しゝるゝゝゝゝゝゝ八田乃城ゝ押へを置諸城

乃通路を立切ゝ再度かやう乃災あるべきゝくい
ゝもゝのまにゝ置ゝしゝゝゝゝゝ悔しけゝ早
く八田乃城へ御手遣ひいゝ當城へ後詰叶ひかたく遂
ゝを船江乃城もいにをゝく落去ゝしゆべしと諫め
しゝを信長聞食汝ゝ條尤ゝゝ間近き船江の敵
城を捨置ゝ重ねく本城奇急乃ゝき妨ゝさんを必
定ゝゝ然らゝを枝城ゝもはゝく落去ゝゝめ外ゝ心掛
ゝふき様ゝ計ひ置本城を責詰ゝゝ味方の兵士心
を一ゝゝゝく城攻をゝけむゝしゝ勿論八田乃押を
置通路を斷く責さゝべし船江乃城を踏潰さゝんば
我讃憤を散しゝ難しと宣へゝ秀吉ゝゝび諫るゝ及

ぞび然ども能く八田を押させらるべし船江の落城を全く八田の押さあると言上しけるを信長ゆも尤とうあげうをもひ早く西方の諸将を召寄らるを船江の輩夜討をび西方の一組まく相互に助合くるちゝ討ゑ佐久間右衛門尉同左京亮を手勢五十余騎を以て八田の城を押え搦めに身動をもあさしむることあらるを氏家ト全安藤伊賀守を船江の城に向ひ一時攻に攻潰し夜討に逢し辱を雪ぐゑし阿閉淡路守同萬五郎塚本小大膳等を氏家安居を援けてとも船江に押寄ゑし殘る面こハ陣所に止り西方の備組を相守るく油断なべうひ心を入く手柄をと仰出さるしかいづるも勇まげるべきかしと

まるひとゝもをそび佐久間右衛門尉信盛五千余騎て八田の城を押えんと打立ハ氏家安藤阿閉塚本勢都合五千余騎船江をさして攻寄たり信長こゝを見もよくいづるも能を見えたるとても萬一難儀の時加勢に遣ひるべし用意をと旗本の勢を引まけて三千余騎別に備を立ふらの時搦正具を夜前の合圖程よく調ひ船江の輩十分に利を得しい喜の酒を士卒に酌をそのらゃけるを信長定光く夜討をこゝを怒て船江の城へ軍勢を遣し向責潰さんと謀ちうこゝ然らぞ安保安居心を猛しこを小勢に

てさぞかし難義なるべしこゝを援だいあるべうと
とく再度使者を船江へくり昨夜乃首尾おそふ
圖まあて御勝利乃条御手柄ヶ計ふ〳〵志ゝ〳〵
織田信長定めし鬱憤乃あまり追付寄来りひべし
能く御心得いく堅く御守ゆく船江を要害うく寄手
乃ためよ足場あ〳〵く容易を責かさ〳〵各く志を堅
く〳〵く防ぎあて〳〵寄手何わどの勢たりとを三日
四日を保たんことを安かるべし〳〵その内まを生まさ謀
を廻ら〳〵奇策を以く後詰をぞ〳〵少〳〵も屈をび籠
城ふ〳〵あと懇よゝ遣〳〵けまバ安保も安居も轍
魚乃水を得たる心持して當城へ於く大敵をひき受

軍をんことを生前乃おそひ出死後乃面目ちるべし
ふも堅固よ相守り若叶そびを面くいさをを討死
〳〵く君恩よ報ぞべ〳〵いさをも機遣〳〵く思召べう
ぞと返答をかを楠も安保安居ゞ忠誠を感〳〵後詰
乃工夫をふ〳〵たりける織田方よてを佐久間右衛門尉
信盛同左京亮與力よを三橋傳左衛門市橋九郎左衛門
尉等五千余騎隊伍正〳〵く押寄来て八田の城の四方
を取まき陣を取正貝こゑを見て偖を信長夜討の
計略ぞ方すゝ出〳〵ふんと推量〳〵重ねく我
を動かを函〳〵き爲よ當城の押えを差向〳〵とおゞ
えたり然ハ織田乃兵船江の城を攻ると知るかくの如

く大勢ふて圍まれぬれを後詰乃人數を出さてと
も容易く至り着がたし〳〵何よりをまして工夫を凝
して居たりけり船江乃寄手氏家安藤を五千余騎
を一手とふし船江の城よ寄るやいなや先度乃恥を
雪ぐんとを雑兵下こまでも心を一つふして鉄炮を
打りけ無二無三よ乗破らんとひし〳〵をきける當城を
國司不智齋隱居所の爲よ築きけるを左右ものめて
三方よ大沼を繞りし容易く押付ることかあそび大
手一方ばかりを平地よ續いく塀高く堀ふか〳〵矢玉藥
を沢山あり寄手たを一をふと競へども要害らけ
を左右ちくをみ得び責あぐねて見えをりける

氏家入道大よ怒りうの城一つ落〳〵得ざをを何として人
よ面をむくべきぞやとて近隣乃在家を壊らく一処よ
取集をその外よ柴埋草を多くあつ先明日ぞを七日
乃早天より五千余騎を三つよまけ一手を竹束を持
をく眞先よ進くく矢玉を防ぐを二手を柴埋草を荷
擔して堀を埋んとををらき一手ハ只今埋たる堀を
をたくく塀よ寄付責入んとをを謀りけふ案のごく
城をを打出を矢玉をこの竹束よ防うをて心易く堀
乃中よ埋草を入く一条乃平地を作て出きを寄手三
千余騎ひたをと走りて堀をををて塀乃をを
をををふあをや此城只今攻落さをん見えたりけ

るに城方まてをほしうて少しも見ぬふりして居たりけるが寄手塀際へ着処を見とゞめしうち並ぶる櫓より大木大石を一同に投うちをとして寄手五六百余人頭を撃ち背を壓し手足を砕きて倒し伏したるを白てをうつけると左右の狭間を切ひらき鉄炮を嚴しく打出し塀をろぐんとたるものを鑓長刀にて切落し突落し防ぎけるぞ寄手心を矢猛にやきもどをを先手千余騎思ひ〻〻颯と引退く安藤伊賀守こをを此城一ツ落し得ぞ何面目に命を惜むべき引ふ進めとあをれどもさらぬ敵と戰ふるもあるべ空しく木石ろために打殺さるんとの口惜さに只関乃声を發とる計すく今を再び塀を越んとをるをのも形く城を白眼えく居たりしを氏家も安藤もきんうを形く是ぞ心を尽き甲斐もなく引返を様やあるとを勵ましかとも士卒疲を〻日夕陽に傾けを無念しくばらてあけをとも其日をけして仕出したるともなくをを引退きて陣をとる

重修眞書太閤記三篇巻之十七終

重修眞書太閤記三篇巻之十八

楠正具再度謀を行ふ事
并服部左京亮楠ふ一味の事

氏家常陸介入道ト全安藤伊賀守両人信長乃下知ふるゝ五千余騎ふく船江の城ゑ押寄終日手をつくて攻々れ共城強くして寄手損亡多く日も暮ゑ及べゝ是非ゆく責口を引退き陣を取て翌日の軍を待由聞召信長弥怒つゝもひ船江乃奴原いうふゑバ左程ふ剛勇あるふやゝゑ義あゝバ大軍を以く無理責ゑ責落さべゝとゝるゝく用意ふゝもひける三千余騎を加勢

〻く重て船江へ差向られ只一息ふ乗破るこゝと下知しもふ船江の寄手い昨日の軍ゟ數多手を負殘る兵士も大ゟ氣を減し勞ゟ果たる処へ新手の加勢三千余騎馳加たるしかい再生の思ひをふして勇〻立今日ゟそ當城を攻落し此日頃の鬱憤を晴をのゝと都合其勢七千余騎昨日の如く城下ふ押寄鉄炮を打うけ短兵急ゟ攻立けるに城中ゟても同じく鉄炮矢石を飛し命を棄火水ゟふるゝや者共と千余人ゟ心を一つふして防ぐ程ふ寄手大勢へといへども道狹くしく一所ふ進〻難く入替〻責ゟども城中乃矢石ゟ當て進〻得ず幾度も同ド様ふて塀の一所も乗破ふ〻

あさつぶ今日も空し〻く引退く休息をり此時八田の楠正具ゟ船江乃後詰を打ゟへども織田勢大軍ゟく取巻たるゝに容易ゟ出ふこと叶ゟひ是ゟ〻〻又〻謀略を廻らしけふ急度ゟそひ出せしこゝありとて恐びゟ馴たる郎等一人撰〻出し汝如何ゟもしく長島ゟ至て此書翰を服部左京亮ゟ〻〻服部ゟ返書を取来るべしと口状ふほく云ふ〻高人乃体ゟ出立をて容ゟ城中を出しけるゟあの者寄手の陣処〻を隠ゟたる様ゟもゟく大風ふ通て援て長島ゟ行着服部左京亮ゟ對面し楠乃書翰を渡しけゟい左京亮受取これを披見もるゟ船江乃軍こと急ゟい某の城大軍に圍

まれ援ひを出しがたく早く長島乃本願寺門徒を御催促あるべく船江并ふ當城の後詰頼入いりつ石山の上人へも御加勢乃ことを願ひ出てゆゑ御書を賜ふてい〻〻〻〻此者に御聞ゆへしとぞ書たりける左京亮やがて此男に汝石山へ參上し上人の御諚たるゆゑ伺ひゆやと尋ねるまばいうゑも拙者石山へ參上し楠り書翰を奉て御加勢を願ひ処上人不敏ゆ思召〻〻御諚有て石山近邊の御門徒を加勢に下ちまうんとおぼ〻〻えを〻ども事競こ〻〻〻〻謀をれ軍整ふ通じ依て長島乃門徒ゆ援兵乃ことを仰出ちまひ御書即こゝよりとて出〻〻けるを左京亮請取盟噉して拜見もるに

その地の門徒等心を一つゝして楠を援け船江を援めべしゆゑの由馳走ゆ〻〻〻〻莫大乃報恩ゆ〻〻〻〻思召〻〻〻〻

昔家老下間頼龍同頼廉〻〻の奉書ゆ〻〻

下間頼龍を源三位頼政十二代法橋頼善の次男上野法眼頼慶乃二男上野介眞頼乃長男ゆり童名を松菊丸顯如上人ふ仕えて按察使法橋〻〻〻〻頼廉い頼善乃弟下間越後守頼永乃四男源十郎頼包乃長子右兵衛尉頼康乃一男今年三十二歳ゆり刑部卿法眼〻〻〻〻

左京亮元〻〻て正具をぞ勢州乃謀主と頼〻常ゆ親〻く音信を通ぜる際〻〻〻〻ふをびたゝひ楠一分の頼〻

彩らとも打棄置ぬきにあらんや石山らうの御下知ある上を片時も猶豫とべらるゝぞ早く門徒を催促とべしと勇を立て見く正具乃郎等やける様いかゝ御加勢あるべくい此のごとく御計ひあらく然るべうんと存てゆとく密書を出と左京亮これを披き熟讀し終りて實に奇妙の良策とうなづき然らば如此く計らひやべしとく即時に長島の道場坊とうゝ門徒の首領に右乃旨を申送り近隣乃門徒郷士百姓を催促しけるゝぞふ我もくとそれ集り瞬息間に一萬余人に及びけり此輩を郷民といい何も究竟乃者共にて武勇を心掛ける逞兵ぶりぞ服部心中に大よろこび楠ゲ

謀うしく如く一萬余人を二手に引分一手は道場坊を大将とし南無不可思議如来と書る大旗をたてし五千余人信長乃本陣桂瀬山を襲ふ一手は服部左京亮を大将とし五千余人おのゝ名号乃旗をたてく織田乃陣へと進發せり是を楠ゲ智謀乃正具か移くうう浄土真宗乃風議を察しまた代一臂乃援とかもべきことを慮て本願寺上人へも拜謁し時く音信を通じけるゆゑ石山乃容子も熟知りまゝ下間乃奉書をも作て出ぎしふう然るを服部を真に本願寺ゝ乃下知と心得かくい謀てしふう然彼一向門徒等一萬余人桂瀬山へ馳向に織田方乃兵士ゝるに望見く敵ゝ味

方うとゝぶ〳〵く思ふ処よ信長乃本陣近く移るもそ名号乃旗もそまらも鑓長刀を伏く大将分乃ものぼり静くと馬落の外よいたら是ハ摂州石山本願寺の門徒よてゆ織田殿天下静謐の為よ軍馬を起さゞ一条近頃以く感心の至つまふゆ僧徒たらとも何とく是を他よ見ゆべき武士やどの働ハ移るあ〳〵くゆ〳〵とも心を更よ劣るまゝ〳〵くゆ御陣頭に叅上一御加勢仕ゆ〳〵と本願寺上人うつゝ下知ゆて叅上仕ゆ相應乃御用を御差圖あるれ攻手の内へ御加下さゞゆ〳〵とやけれそ信長聞召儲を石山乃顯如上人ゑ武威よ恐怖一かくのごとく追従乃軍勢も下せ〳〵とおぶえたら然移る〳〵僧徒の加勢も假ん

こと武士乃恥辱第一ふう依く攻手の内へさ一加えんとゆおをひもうゝび去移る志乃ゑど優一けまゝ陣見廻ゝと披露一近隣よ病せ一むゑ一若又用事をあるゝバゝの時や沙汰もべ一と宜ふを道場坊承ゝう某等本山上人乃下知にゝう叅上仕ゆ要空一く御陣下よ病陣仕ゝゆく攻口の一方を請取不や い外聞實儀迷惑仕ゆ何處ふてもあれ相應の攻口を御下知ゆ様ふと中上ゝり本陣の傍ふ陣を取てゞ居たらける是を先達く信長京都滞留のうら三好等ゝ蜂起を一ふ付てゆくてを攝州のうらふ要害の地を見立一城を築き西國乃押とゝべ一何ゝうゝ見立く叅れと明

智光秀より仰られしは攝州石山本願寺乃地こそ無双の勝地ふゆと言上きこえしに信長もうねて心付まつる要害なれば早く使者を以て石山乃地を懇望あらしむるに此地を蓮如上人草創乃靈場なりとて本願寺上人所望より應じおそれ

本願寺八代蓮如上人明應五年七月下旬山城國山科東野村本願寺を攝州西生郡天満の地へ移され石山龜ヶ池乃ほとりへ御堂を建立せらる蓮如上人八十二歳乃時なり同八年三月廿五日蓮如上人遷化九代實如上人十代證如上人十一代顯如上人まで四代七十餘年相續乃寺地なり

信長元来本願寺門徒をふくまひけるより此返答を門召て大に怒りその儀あらば石山を責潰しなりを取んとのたまと罵りて木下とはば免諸将諫言して暫く無事に治まり処今加勢とて門徒等大勢衆向せしかば信長られて本願寺上人乃謀を漏聞て俄に追従とりて発さを何乃用心氣もふく本陣乃傍にさし置きしに偖も服部左京亮も五千餘人を引率し八田乃城に赴き寄手佐久間乃陣に案内し本願寺の下知にて信長へ加勢乃ため参りたる趣同様に述たりしかば右衛門尉信盛これを聞く神妙のことなり然るに此陣に兵士不足なり

さきび加勢より及ぶび御本陣より趣き言上あるべくゆと
やがて服部がしらに我等一人乃ゝふもゆゝえび數多
乃兵士を召具いとゝふう御陣頭を通行仕ゆとにをゆ
御勢數日乃御勤勞御疲もゆべし我等が手乃をの鳴
呼げましくいゆへども度こ丸金をあらけりる覺えも
ゆ御勢乃守る処をゝふぐし守らをらゝを子細ある
はしくゆ御料酌より及びど御遣ひ下さまゆべしといと
頼母げよやけきび佐久間が勢どもこの一両日あんんと
軍もをど徒然と守て居ゝをまび退屈して何で少
し休息をげやと思ふ折節うき加勢幸ぢう此輩を
役所より置く代らんをのをゝあをひて佐久間を勸め

けるふゝを佐久間元ゝう本願寺門徒より殊より石山乃
上人を信仰しけるゝゆへ是も同じく服部がやり旨より
從ふくゝその手の兵士五千余人何乃疑ふ心ゆあゝん石
山門徒乃加勢ぞとおをひの儘より病陣ちをくけて

正具佐久間が陣へ夜討乃事
并長島勢信長乃本陣を騒げび事

楠正具ゝ船江乃後詰を押えらまゝゝよう如何ゆも
べゝと思ひ謀り腹心乃郎等を長島より遣ゝ服部左
京亮を語らをしいどもその事成就をゝ否いま
慥ある消息を知らを徒より日數を筭へく待居ける処ふ

寄手の陣より新手四五千ばかり加はりいづまも南無不
可思議如来とゝなへ大旗を立てゝ望みを見て偖も我
謀略成就し服部左京亮長島乃一向宗を駈催ふして
當陣中へ来りて覺ゆるぞ然らを信長乃本陣へも
わかりの勢まく行向ひいらん今宵一夜討して佐
久間う勢を追ひらひその勢ひ本陣までを付入る
しと俄に用意をふして宵のわざに兵糧つくりを勝つ
たる逞兵五百余騎佐久間乃陣を襲ふんと時刻を待て
扣へたり此時寄手乃陣まくハ服部が手乃者佐久間
う勢を追従しく嘲くく勞れあらん某等ハ新手ふり
夜分乃番を承るぞしとゝにすり何も悦び一禮し

然らハ暫時頼まべしく持場くを引渡しくふ甲
冑を脱ぐ快らく今夜こそ休むべけまとて打ちひくを
後陣より引退きけまバ佐久間が陣中以乃外無勢まふ
て與力乃輩さくハ近習馬廻りの侍ばかりにけ
う服部左京亮十分仕負をたりと心中より大ふ悦び先
陣中乃案内を見つゝ定めく楠も我等ゞ爰まで来
つゝことゝバ會圖乃旗まて知つゝん然ども念のために
こゝを告知まべしとゝく彼使より来つゝ楠ゞ郎等をハ
田へ歸しけ元らう佐久間が兵より代りく陣中を預つゝ
わどのこゝふまバ憚る処ゆく門くを出しけまバ彼者急
ふハ田乃城へ立歸て斯こと告しかゞ楠大より悦びまづ厚

くその郎等を賞美し恩賞をあたへ我既に用心ふかく置
けばこの今宵夜半過ぎに相違なく打て出べし今更
いまだ及ばねども通路斯乃如く自由なるこそ汝ら
服部が許へ行向ひ能く相圖をなすべしとて彼郎
等を寄手の陣へ遣はせば服部もまた楠の夜討乃
始末を聽黙笑しく待居たりその楠手乃者共を
近付て面々高名手柄を爲やと私なく一人立乃
働を心掛ることなれば只いづれも心を一つにして爰に備
へし佐久間を追散し得た味方十分乃勝利と爲べし
分捕なども爲こと私なく偏に備を突くづし敵を驚し
追出すを以て宗とすと下知をかを從卒なる其

捉を守り既に定発し時刻ふもなくかば正具まれ等
を引率し密に城を出て寄手の陣小押寄相圖の鉄
炮をそなへつゝ否間を作りて陣中へ真驀地に駈入り
然るに佐久間が陣中大形な服部が手の者ふまば楠が
兵を引連て案内知たる役所々々を馳廻て夜討を防ぐ
体なく只声ばかりをあげ立ては夜討の入たるぞ敵の
寄るぞと呼ばれつゝ走り発ぐまた敵か味方か紛ら
へ上を下へと混亂なる佐久間信盛大に驚き與力
と共に防がんとひしめきけるを陣中こゝぞ敵兵とふ
て四方々々鉄炮を打かけ鯨波を揚て無二無三に責
立るをうつを発て加勢に来つる石山勢を以てこれ

を防ぐぞやとおもひ服部を尋るゆ何方へ行しやいと
き見へどその外をゝふ帯紐解く休息の素肌武者乃
ゝゝく物の用ゆ立べくもえつと周章さゝぐ計して疵
を蒙り同士討をるその多やうけるゝ佐久間も今ハ
爲方ゆく陣を棄て走てけるハ阿閉淡路守同萬五郎
も狼狽して敗軍をさるべ佐久間ゆ陣中ゆ棄られし
繋ぎ馬と甲冑弓矢乃數あひたゝふゝいつも愚
楠やゞて諸勢を下知し短兵急ゆ追掛此臆病者を信
長乃本陣まで追籠らと厲まをべ楠ゆ手乃者服部
ゆ五千余人と一手ゆ成く追たらけゝ佐久間を陣中を
うけぬを備を直して防ぐぞやとあをひしゆ敵いゝも

急ゆ追詰殊ゆ今まで味方ゆあゝ本願寺勢もいつ
しか楠とひとつゆ追来をゝ偖を敵の謀ゆ落しゆ口惜
き次第ゆふと怒り罵をゝども手の者多くい素肌ゆをべ
一防きりも及をゝ崩をけて佐久間阿閉一所ゆ打寄一
息繼く戦をんとをる処へ敵潮乃湧如く追来をを這
ゝ乃体ゆく信長乃本陣まぐ押付られゝて楠をつと
心付居城も大事を軍ゆ勝たゝ早引返をゝといつまに
佐久間ゆ捨たゝ武具とを多く分捕ちを悉くこをを
士卒に分與へ勇ゝ進んぐ引返をと桂瀬山の本陣ゆく
を長島の門徒信長乃陣の傍ゆあゝく今宵夜討乃
相圖を聞宵ゆ本陣乃体を窺ゆをば先を旗本一

萬ばうもあらりゝか船江の加勢ゑ三千余人を引分
遣そ〳〵まゝ西方の攻口無勢ゆへとく遊軍たらし木
下藤吉郎をさ〳〵向らる木下御本陣あまりゑ無勢ゑ
あそ〳〵ゆゑとゆけ出しとも信長今日中船江を責落
ゝをけ出ゝそゝらの間ゆへ少も苦〳〵からゝと仰出
さそふふそゝ木下も力ゆへ〳〵西方ゑ赴くそゝ〳〵本陣の
勢そゝふ四千ふ過さうけてその上武勇の兵士悉く
諸所へ分遣そゝ出そく旗本ゑハ去べき勇士もあらそける
ふゝう長島門徒を幸ゆへ〳〵出〳〵本陣の傍近
く置出〳〵ふその夜も既ゑあけ渡う丑三そゝそゝふ
〳〵時長島勢心ふ打立時刻ゝ〳〵と待処ふ八田へ遣〳〵

置たる物見乃士卒ゆけて返て彼表の首尾斯〳〵と勝
軍乃容子くはく語て早此方ゑくも責掛てゝ
やと告けふゝう五千乃兵士本陣ゑ忍ひゝう俄ゑ鯨
波を噇と作て鉄炮を打けけ乱入をゝかバ旗本以の外ゑ
周章〳〵狼狽騒ぎ立あゝを何事そと起出く防ゝんとゝ
あふ五千餘人乃門徒勢四方ゝう込入楠七郎左衛門尉
正具あふあう織田殿ゑ見參をんと呼そゝく切て廻ゝ
ハ陣中いゑく周章駭き近習小性乃面く得ものを引提
夜討乃兵ゑ渡て合爰ををんぞ〳〵戰へども實も思寄ざ
るそゝふゝ楠と云名ゑ聞怖〳〵果敢く〳〵くもええ
ぢけゝ信長大ゑ怒て自身切く出んそゝ〳〵ゝを

明智光秀押とゞめ此夜討を本願寺より加勢とふく来つゝ輩はゞゝ正具とふを偽てふく只味方の意を惑すもべき謀と知またりさまでも大勢乱入きゝはまゞ殿よい危きを避させあべゝと進め奉つけるよりう信長是非ふく一方を打破てるかふもまを道まてあ光秀今心安ゝとを歸て郎等共とそげま丶防戦時を移を処ふ八田を押えゝ佐久間ゞ敗軍の兵士等素肌ゆまふて息も繼あゑゞ散乱ふ逃来る夜討の門徒等これい織田勢ゆゝと見知たりけまべ態を中をひきく陣中へ追込けまべいづまも能隙ぞと心得く面もふゞ本陣へゝて入を本陣ふも夜討押入

く上を下へと混乱を只今逃来てゝ佐久間勢こまよ驚き逃出んとをれを後ゝ門徒ゆ一毅攻近付たて進んぐ信長の旗本と一ふゞやとおそい合戦寂中く前後ともよ敵ゆ勢充満く道ゞき道ふくあき是をて居てけゆ処へ長島勢中を開き左右ゝて駈立まべ素肌武者共防き兼同士討とること数刻く長島勢ハ十分ふ陣中を駈脳まゝ味方を二所よまゝめ騒動を敵よゆづつて早く退き歸りゝも陣中まてハあまを知ゞ逃る味方を敵と心得たゞ火水よ成て戦へゞ佐久間ゞ手の落武者と本陣ゆ素肌武者互よ敵とゆゆを違へ是非ゆく挑ゝ戦ふく討ゝその数を

知ぬ漸暁に及ぶ頃城責の織田勢本陣へ夜討入く信長乃行衛しれと沙汰しけるを聞付いづれも城責を棄て取ものも取あへず皆桂瀬山の本陣へ引帰さる本陣なれば明智を初先佐久間阿閉が輩一所ふあつまりて夜乃明るふるふ討死手負を吟味するに敵と思よて切伏し者皆味方の士卒なれ實の敵兵ハ一人も討得ざるしハ拳を握て歯を喫て怒を共詮ぞなき去ふくも大将ハ何方なりやと尋ぬれども明智光秀馳出し信長を守護して引帰しけるにふる諸勢一同ふ大将恙なくましましけるを悦びたぐ今夜乃面目さを悔くけるをうてけり

重修眞書太閤記三篇巻之十八終

文祿慶長

永一巻